令和6年度　緑区・淑徳大学対話会　議事要旨

日時：令和6年6月21日（金）　15時10分～16時10分
場所：緑区役所5階　講堂
参加者：淑徳大学コミュニティ政策学部　16名（教授2名　学生14名）
　　Link（令和5年度地域活性化支援事業補助金交付団体）　1名
　　（区役所）　緑区長、緑区地域づくり支援課長、緑区地域づくり支援課職員

1　開会
2　区長挨拶
3　地域活性化支援事業　事業説明
4　こども食堂　取組紹介
5　意見交換　「緑区地域活性化支援事業」の取組みについて

〇淑徳大学　教授
　こども食堂に参加者する子どもは子どものみ又は親が連れてくるどちらの場合が多いか。
●Link
　会場までは親が連れてくる子もいるし兄弟や友達同士で子どもだけでくる子もいるが、食事は子どものみとしている。大人がいると自発的に行動できない子もいるため、大人の目がない状況を作りたかった。

〇淑徳大学　教授
　子どもの手助けすることを「おせっかい」という言葉で表現しているのが印象的だったが、どのような意図でその言葉を使っているのか。
●Link
　地域の子どもの手助けをしたくても肩書がないとできることが少なかったが、子ども食堂を立ち上げることでオフィシャルな手助けを「おせっかい」と呼んで活動している。困っている人を手助けするポジティブな言葉として使っている。

〇淑徳大学　学生
　子ども食堂の活動をする中で一番有意義に感じた出来事はなにか。
●Link
　子どもたちが『おいしかった』『初めて食べた』などと言ってくれることは純粋にうれしい。また子どもたちや関わるスタッフが楽しく過ごしてくれることは喜ばしいこと。スタッフで長く続けてくれている人は、自身が難しい家庭環境にあった人が多い印象を持っている。そういった人たちが子ども食堂を自分の居場所として携わってくれていることに活動に意義を感じている。

〇淑徳大学　学生
　地域活性化支援事業補助金の財源はどこから出ているのか。
●緑区地域づくり支援課
　市税を原資としている。生活していて税金の使い道を意識する機会はなかなかないと思うが、このような事例を知っていただき、税金がどのように使われているのか、どういった事業に使ってほしいか等考えるきっかけとなればありがたい。

〇淑徳大学　学生
　全国的に人口が減少する中で緑区の人口は増えていると聞いているが、要因をどのように考えているか。（実際には緑区は 2022 年より前年比減少）
●緑区長
　現在は市全体では人口増加の状況であるが、このあたりがピークであると考えられ、今後減少に転じることが見込まれている。緑区は外房線沿線から東京方面へのアクセスも良く、住宅地として選択される方が多くいらっしゃると感じている。2040 年問題と言われるように 2040 年には団塊ジュニア世代が 65 歳を迎え、高齢者の割合が約 35%に達すると同時に、少子化による労働人口の急減により労働力不足等の問題が見込まれている。この問題は全国例外なく緑区にも影響することは避けられないと認識している。

〇淑徳大学　学生
　子ども食堂の事業立ち上げにあたり、最初にどこに相談したのか。
●Link
　始めにインターネットで資格・法律等を調べたところ、誰にでも始められるということがわかった。安心で安全な場所にしたいという思いがあり、千葉市社会福祉協議会緑区事務所に相談をした。話を進める中で周辺地区の全自治会長に承諾を得る必要があり、ハードルが高かったが千葉市あんしんケアセンター土気に協力いただき話を進められた。立ち上げ時から関係者に恵まれたと感じており、周囲のおかげでスムーズに事業をスタートすることができた。

〇淑徳大学　学生

　補助期間終了後、緑区として団体の事業展開に関わっているのか。

●緑区地域づくり支援課

　各団体に直接区がかかわることはないが、毎年度補助団体向けに行うフォローアップの研修では引き続き活動に資するため、参加を呼び掛けている。また居場所づくりの活動をしている団体は多く、横のつながりを求めているケースもあるため、新たに団体から相談があった場合は、過去の活動事例を紹介し団体同士の活動をつなぐことで各団体の活動をサポートしている。

〇淑徳大学　学生

　緑区役所と団体とで具体的にどのように連携をとっているのか。

●緑区地域づくり支援課

　一例として団体の活動場所を訪問し現地視察を行っている。現地を見ることで新たな気付きを得ることができ、それを今回のような機会やHP等で共有することで市民の方々に各団体の事例を広めることができると考えている。

〇淑徳大学　学生

　子ども食堂で発達障害や知的障害の子どもを受入れているのか。また受入れている場合大人の付き添いなく食事できるのか。

●Link

　受入れ事例はなく、現在は受け入れられる体制にはなっていない。実際にそういった相談があった場合、安心して参加できるようにするには個別の知識も必要になるため付き添いが必須になると思っている。そういった状況は想定しておらず今回質問をいただき新たな気付きがあったので今後の運営の参考としたい。

　以上